

令和7年度 第2回京都府立図書館協議会 議事要旨

1 開催日時

令和7年11月7日（金）13時30分から15時00分まで

2 場所

京都府立図書館（京都市左京区岡崎成勝寺町）

3 出席者

安達佳代子委員（zoom参加）、荒田和子委員、伊澤慎一委員、大塚正広委員、桂まに子委員、潮江宏三委員、永田紅委員、西村明彦委員、原田隆史委員（会長）

4 会議の内容

- （1）京都府立図書館サービス計画について

5 協議事項

- （1）京都府立図書館サービス計画について

- 事務局から概要について資料に基づき説明
- 委員意見

- ・「I－2市町村立図書館等への支援」について、市町村立図書館等のニーズ把握のため、これまで会議や巡回訪問を実施していたが、令和8年度からはなくなるのか。
 - ▶ 廃止するのではなく、会議や巡回訪問に限定せず、柔軟な支援方法を模索しており、オンライン会議なども活用し、引き続き市町村立図書館等のニーズ把握に努める。
- ・「I－3子どもの読書活動の支援」の自習スペースについて、対象者や設置場所の具体案があるのか。
- ・評価指数の冊数は、どのように把握するのか。
 - ▶ 冊数については、返却ボックスやレシート記録を活用し、館内利用を把握する工夫を検討したい。
- ・学校支援の記載がなくなった。子どもの読書習慣の変化を踏まえた取組は理解するが、学校との連携を計画に入れて見せることが重要。大項目から外れても、せめて小項目で連携方針を表明して掘り起こしていくべきではないか。
- ・学校という組織を巻き込んだ支援は欠かせない。単に「学校支援」と記載するだけでは不十分で、より踏み込んだ具体策が求められる。抽象的な議論に終始すると、取組の実効性が薄れるおそれがあるため、分かりやすい方針や実行可能な方法を示すことが重要だと考える。
- ・府立高校との連携や探究活動への関与は発展性があるが、小中高生への具体的な読書支援の記述が曖昧。
 - ▶ 学校支援の充実は継続する方針に変わりはない。子どもの読書活動支援と一本

化して記載している。

- 支援の在り方が、方針転換をしているように見える。従来は市町村立図書館等を通じた支援が中心だったが、就学前児童への直接的な支援が前面に出ている印象がある。
 - ▶ 方針転換ではなく、これまでの学校支援の取組をさらに充実させたいと考えている。対象を広げ、就学前の子どもも含めた包括的な表現にした。ただし、現行の書き方ではその意図が十分に伝わらないとの意見を踏まえ、表現を検討する。
- 全体的に、市町村立図書館等や学校図書館への支援が後退した印象を受ける。府内全域を統括する役割の記載も弱く、市町村レベルの取組に偏っているように見えるため、記載方法を工夫し、府立図書館の広域的な役割を明確化すべき。
 - ▶ 基本方針の趣旨を変更するものではなく、現行の３本柱を維持しつつ課題を整理して充実させていきたいと考えており、全般を通じてそういった趣旨が伝わるよう検討したい。
- 「Ⅱ－８ 府立図書館の情報発信」について、情報発信力強化のため、大学生との連携やコラボレーションによる発信はどうか。また、SNSは投稿回数（アウトプット）ではなく、フォロワー数や閲覧数（アウトカム）を重視することで、実際にどれだけの人に届いたかを測る評価指標となる。
- 大学生との連携については、資料にある「Ⅱ－９ 多様化する図書館サービスの的確な対応と充実」の「府立学校・大学等と連携し、図書の魅力発信の取組を推進」との方針は評価できる。ただ、現状では府立図書館の利用が一部の学生に限られている。
- 現計画で達成が難しい岡崎エリアの文化施設との連携については削除せず、今後の発展に向けた方向性として残すことが望ましい。

また、府内全域へのサービス提供という視点がやや弱い印象がある。オンラインサービスやデジタルアーカイブの充実に加え、来館が難しい北部地域への対応も含め、府内全域サービスを目指す意図を計画に反映させてはどうか。
- 「Ⅰの府内全域の図書館等をつなぐ」しくみづくりを目指すための、オンライン貸出の充実を図るためには、紙の蔵書削減など大きな方針転換が必要。一方で、紙資料を維持する選択肢もあるが、現状では府立図書館が全域サービスを担うのは難しい。将来像を明確に示し、利用者にとって利便性の高いサービスを構築することが求められている。
- 評価指標の在り方について、貸出冊数を主要な指標としてきたが、近年は利用者数を外す図書館が増えている。代替指標として入館者数が挙げられるものの、府立図書館の目標としての妥当性には疑問が残る。市町村立図書館等では貸出冊数や入館者数が重要な指標だが、府立図書館の場合、入館者数が少なく

ても資料貸出やオンラインサービスが充実していれば評価できるという考え方もある。

- ▶ 現行の指標では、入館して閲覧された資料や貸出できない資料が評価に含まれない。閲覧や貸出不可資料も含めた「利用冊数」を検討している。
- ・過去の統計調査では、館内での閲覧回数は貸出冊数の1.5倍に達する可能性もある。貸出冊数だけでは利用の全体像を示せない。
- ・今後は入館者数だけでなく、滞在時間やデータベース利用、電子書籍の活用状況など、図書館の利用実態に即した指標の検討が必要。
府立図書館ならではの利用実態を反映した指標の構築が求められる。
- ・イベントの実施状況を指標に含めてはどうか。企画数や参加者数を示すことで、図書館の取組を可視化できる。
- ・イベントの記録や参加者データは、図書館の魅力を示す生きた情報。貸出や返却の数字に偏らない評価のために、どのような企画を実施し、どれだけの人が参加し、どのような成果があったのかを示すことができるのではないか。
- ・展示は図書館の魅力を伝える取組の一つ。世界的にもラーニングコモンズの部屋が展示スペースに転用されるなど展示が重視され、独自性のある企画が評価されている。府立図書館でも、ほかでは見られないオリジナルな展示や新しいサービスを発信することが有用。
- ・「Ⅲ－12 知的な交流の機会提供」について、広域利用を考えると、遠方から自習目的で来館する可能性は低い。自習室は静かな学習には適するが、地域交流の場としては難しい。自習と交流、どちらを優先するか目的の明確化が必要。
- ・フィンランドの有名図書館を訪れ、空間の柔軟な使い方が人を惹きつける要因だと感じた。立地や建物の特性を活かし、来館者が自由に目的を見つけられるフレキシブルな空間づくりが望ましい。
 - ▶ 探究的な学習や対話ができる柔軟なスペースを想定しているが、意図が伝わるよう表現を検討する。
- ・府北部地域では、府立図書館との連携が利用者に伝わりにくい。デジタルサービスの拡充が府立図書館を身近に感じるきっかけになるかもしれない。
- ・身近に感じる工夫として、貸出文庫の資料に専用カバーを付けるなど、府立図書館の蔵書であることが見てわかるしくみも一案である。子ども向けには、予算を工夫し、探究学習や読み物に焦点を絞った提供が効果的かもしれない。
また、デジタルサービスの拠点となり、市町村立図書館等を支援するしくみを整えることで、府内全域の連携強化につながる。こうした取組は、府立図書館の役割を広くアピールする機会になる。
- ・岡崎の立地を活かした魅力発信、SNSでアイデンティティを高める情報発信が重要。大学生との協力による発信強化も有効策。

- ・若い世代はイメージづくりが得意であり、その感性を活かした発信が効果的。情報を詰め込み過ぎず、写真やビジュアルの質にも配慮し、魅力を伝える工夫を重ねることが重要ではないか。
- ・市町村立図書館等との取組について、活動の様子や連携の状況をホームページやSNSを活用し写真や動画でわかりやすく紹介すればよいのではないか。また、初めて来館した利用者にスタンプや記念証を渡すなど、小さな達成感や楽しみを提供することで、図書館を一層身近に感じていただくことができる。
- ・巡回訪問の様子を写真で紹介することは効果的なPRになる。訪問先や活動内容を文章で説明するより、写真を載せる方が伝わりやすい。さらに、訪問で得られた良い取組や話題を代わりに発信することで、地域とのつながりを強調できる。
- ・連絡協力車の車体に府立図書館名や図書を運ぶイメージを掲載するなど、走る広告塔として有効活用を検討してはどうか。また、前庭で京都らしいイベントを開催するなど、国内外の来訪者へ府立図書館をしっかりと印象づけることで、府立図書館の魅力が広がり地域文化の発信拠点として価値を高めることができる。